



「爽映」

1965年ころ、紙本、彩色
39・27センチ×56・0センチ

高山辰雄 (1912～2007年)

高山辰雄といえば、には、どこへつづくの
東山魁夷、杉山寧とな かわかりませんが、道
らんで戦後日本画界の が描かれています。

「巨匠」といわれた画家 この時期の高山に
でした。ただ、明るく清 とって、道は象徴的な
澄な東山絵画やスケー モチーフでした。画家
ルの大きな杉山絵画に にとって、どのような
比べて、やや晦渋(かい 道であっても、それは
じゅう)な印象をもた 「名のない人、庶民の
れていたようです。 足跡」の集積だとい
う

しかし、その晦渋さ 思いがよかったです。
は、画家の思想、精神

の深まりと無縁ではな 人間の過去、未来へ
かったのです。人間と の思いは、やがて道か
は何か、という自問を ら人間像の表現へと大
くりかえしていたので きく展開していきま
す。 そうした高山に

この作品では、静寂 とっても、ちよとど岐
につつまれた池と叢林 路にたっていた時期の
(そうつん)が描かれて 作品になります。

います。そして画面左

(田中淳)

《名画の扉》

大川美術館企画展から